

図書紹介

モナ・オズーフ著、立川孝一訳

『革命祭典—フランス革命における祭りと祭典行列—』

(岩波書店、1988年)

東海大学大学院文学研究科文明研究専攻・博士課程前期2年

阿部 善宏

人間は遙かな昔からさまざまな祭りを行ってきた。宗教的な伝統行事や地域に根付いた慣習、さらにはある種の集会や大会でさえもしばしば祭りともみなされることがあるように、その種類は実に多種多様である。しかしながら、このように祭りは多様性に富んでいながらも、人が祭りを行うのには必ず共通した意味がある。祭りは常に、何か一つの目的のために多くの人々を結集させて一体感を創出しようとするものだからである。

本書の著者モナ・オズーフ (Mona Ozouf, 1931～) は、革命祭典をまさにこのような「祭り」としてとらえた一人である。フランス国立科学研究センター (CNRS) の主任研究員である彼女は、第三共和政における共和国の観念や学校教育に関する歴史家であると同時に、人間の革命的な行動に関する社会人類学者でもある。その著作には *L'Église, L'École et la République* (1962年) や *La classe ininterrompue* (1979年) などの第三共和政関連のもの他、*La fête révolutionnaire 1789-1799* (1976年) や、ユートピア、革命、教育に関するエッセイ集 *L'école de la France* (1984年) などがある。また、フランソワ・フユレとの共著で *Dictionnaire critique de la Révolution française* (1988年) も著しており、これは1995年に『フランス革命事典』という表題で日本語訳も出ている (河野健二、阪上孝、富永茂樹訳、みすず書房。全2巻)。

本書『革命祭典—フランス革命における祭りと祭典行列—』は、オズーフの革命祭典に関する論考の中から立川孝一氏が三編を選んで翻訳し、訳注などを付したものである。

情勢が目まぐるしく展開し、事件や戦争による混乱の連続であった革命期には、フランス全国で数え切れない祭りが行われていた。しかしながら、これらは通常、革命史の中では無視されるか、触れられていたとしても1790年7月14日の「連盟祭」や1794年6月8日の「最高存在の祭典」など、規模が大きくて有名な祭典のみであることが多かった。

オズーフは従来の革命史において祭典が重要視されてこなかったことを嘆き、むしろ「祭りそれ自体」に着目する。彼女はまず、祭りの条件を歴史家ミシュレに求める。ミシュレは『フランス革命史』において、祭りを民衆の自発性に基づく平和的な結合を生み出すもの一宗教にも似た精神の一体感を現出するものとして位置づける。ミシュレに論拠するオズーフの眼は、祭りが現出する一体感と革命の理想との共通性に向けられるのだが、そこに踏み止まっているばかりではない。彼女は、このように常に祭りの本質を追及し続けた一方で理想主義的でもあったミシュレをも乗り越え、革命祭典の理想と現実とのギャップをヴィヴィッドに描き出す。

本書は、そうしたオズーフの見解が十分に伝わるように厳選された論考をとおして、日本

におけるフランス革命史に新風を吹き込んだものであるといえよう。

以下では、本書に収録された論考を邦題とともに紹介してゆくことにしよう。

最初の論考は前述の *La fête révolutionnaire 1789-1799* の第一章 *L'histoire de la fête révolutionnaire* (革命祭典の歴史) である。その主な内容は革命祭典に関する先行研究批判である。先にも述べたように、従来の革命史においては祭典は軽視されてきた。祭典について論じた歴史家たちにしても、もっぱら政治的イデオロギーの観点に偏った議論を繰り広げてきた。オズーフはその原因について、彼らが当時の祭典プログラムや注釈に全幅の信頼を置いてきたことを指摘し、以下のように分析している。

彼女はまず、当時の革命家がみな政治的党派色を前面に押し出していたことを指摘する。彼らは常に自分たちの祭りの独創性を主張し、それ以前の革命祭典を否定することによって自らの祭りを他の党派のものとは区別してきたという。従来の歴史家たちは革命祭典をまさにこのようにとらえていたため、イニシアティヴを握る党派が替わるときに祭典の性格もそれにとまって変わると信じ込んでしまったというのである。そこにこそ彼らは祭りの限りない多様性と党派のイデオロギーを見出すのだ、というのが彼女の見解である。

こうした分析の結果、彼女は政治的解釈がもたらす祭りの多様性を否定する。従来、歴史家たちは祭りの多様性を論じてきたが、そこに描き出された祭りは、結局はみな似かよったものであった。であるからこそオズーフは、祭典主催者たちの間にはむしろ祭りに対する政治的主張とは無関係な共通の意識が存在していたのではないかと考えるのである。

政治的な意図を追うだけでは祭りの本質は見えてこない。それゆえに、実際に行われた「祭りそれ自体」の内容が重要となる。オズーフがミシュレを評価するのはまさにその点においてであるが、彼女の視点はそれに留まらない。革命祭典が指向する「全体一致」の実現に向けた試みが本来もたらすであろうと期待された結果と、現実的な結果の双方に眼を向けることこそが、革命祭典理解に対するオズーフ自身の確固たる姿勢なのである。

二編目は *Le Simulacre et la fête révolutionnaire* (シミュラクルと革命祭典) である。これは1974年にクレルモン・フェランで開催されたフランス革命の祭典に関するコロークにおいてオズーフが発表した研究報告である。

ここでのテーマとなるシミュラクルとは、革命祭典において実在した人物や実際に起こった出来事を再現する演出や装飾などのことで、過去の記憶を呼び覚まそうとするものである。それゆえシミュラクルを使用することによって、見る者に血塗られた革命の歴史を再認識させ、当時の憤りや憎悪をも甦らせ、新たな暴力を引き起こす可能性があることをオズーフは指摘する。つまり、革命祭典の目的からすればシミュラクルとは本来不要あるいは有害なものであり、およそ受け入れられるものではなかったというのだ。

であるにもかかわらず、現実的にシミュラクルが用いられた祭りが存在していることをオズーフはどのように説明するのか。シミュラクルには祭典および革命の意図することを明確に伝える視覚教育的効果があることも彼女は見逃さない。それが上手く作用すれば、参加者の全体一致にとって大きく貢献する可能性もあるのだ。つまり、シミュラクルとは両義的なものなのだとオズーフは考える。すなわち、理想と現実との狭間で妥協を強いられる革命祭典にとってそれは必要なものでもあり、恐怖でもあったという矛盾を彼女は指摘した

のである。このような事実は、革命祭典がなぜ似通った祭りになるのかを説明する一つの手がかりともなりえよう。オズーフがシミュラクルと革命祭典との関係を考察していることは、理想の祭りは実現可能なのか、すなわち、祭りは演劇なしでどこまで人の心をとらえるのかを問うと同時に、党派のイデオロギーから離れたところで祭りの本質に迫ろうとすることなのである。

第三論考はオズーフが1971年に雑誌 *Annales E.S.C.* に投稿した論文であり、原題は *Le Cortège et la Ville. Les itinéraires parisiens des fêtes révolutionnaires* であるが、立川氏は『都市と祭典 パリにおける式典行列の道筋』と訳出している。ここでオズーフが取り上げる問題は、ユートピアの実現を夢想する革命祭典と、それに対する障害としてのパリという現実の都市との対立についてである。

大空の下で全ての住民が等しく参加する祭りは、まさしくユートピアの具現化であったとオズーフは言うが、同時に、その実現のためにはパリ全体が均質な祭典空間となるような都市整備が要求されることも指摘する。しかしそれは容易なことではないという。パリの街路や広場といった狭く見通しの悪い都市空間は式典行列に不向きであるばかりでなく、祭りのスペクタクルにとっても重大な障害となる。しかしそれ以上に厄介なのは、パリの歴史、とりわけ、革命自体が生み出す血と暴力に満ちた歴史であったという。ユートピアの実現を目指すフランス革命が自ら暴力の歴史を生み出し続けていたその矛盾を、革命祭典はいかにして克服するのであろうか。これが第三論考における問題提起である。

この矛盾の結果、祭りに相応しい場所とは形状的にも歴史的にも「何もない」空間とされた。オズーフは祭典の演出家たちが「空白」としてのシャン・ド・マルスを主要な会場としたり、バステューユのような歴史的な空間の意味を巧妙に作り変えようと試みたりした努力の跡を見出す。しかしながら、パリという都市全体が余すことなく革命的暴力に塗れたことは事実であり、祭典の主催者たちはそのパリにおいて革命の精神を鼓舞しつつも、そのことに起因する新たな暴力の発生を抑制しなければならなかった。オズーフはそこに革命祭典の現実的難しさを見出すのである。

オズーフの研究が従来の革命史と異なっている点は、政治的主張にとらわれることなく「祭りそれ自体」の検討を行っていることであるが、その他にも以下の諸点が考えられる。

まず、彼女の描く歴史が通時的ではないことと、検討の緻密さが挙げられる。何か一つのことを論じる際に、彼女は従来の歴史学が目に向けてこなかったいくつもの祭りを例にとり、それらの様子を時間軸にとらわれることなく鮮明に描き出すことによって論説に説得力を与えている。さらに、訳者の立川氏が「従来の革命史の枠を大きくはみ出している」と述べているように、オズーフの革命祭典研究は *trans-disciplinary* な歴史学を展開しているという意味で、現代的歴史学に先駆けているといえよう。

革命祭典を考えることは文明を考える一つの切り口でもある。オズーフのような取り組みは、今まさに多様な視点から人間営為というひとつの目標に迫るべくして確立しつつある文明学と限りなく接近するものであると感じてやまない。